

『ヤツパ風呂が好き』

広瀬厚氏

4,650 文字

あらすじ

全自動洗体機なるものが開発され、発売と同時に大ヒット商品となった。風呂のないボロアパートにひとり暮らしていた石川五郎は、ある時会社で新人の OL 達が自分のことを、臭い汚いと立ち話しているのを耳にした。それにショックを受けた彼は全自動洗体機の完備されたワンルームマンションへ引越した。

「ふう、サッパリした。こりゃいいね！ まさにクールジャパンだよ」
マシーンから出てきた石川五郎が、開口一番そう言った。

西暦二千ウナン年日本にて、とある新商品が開発、発表され発売されるやいなや、爆発的に売れに売れまくった。さて、その商品とは、
〈全自動洗体機〉である。

頭のとっぺんから爪先まで、全身くまなく毛穴の汚れまで綺麗サッパリ洗ってくれる。全裸でマシンのなかに立つこと三分！ コンピューター制御の全自動にて、どんなに垢まみれの裸体だろうともツルピカリンだ。全自動の他にもカスタマイズして様々なコースが選べる。頭髪重視やら、優しく洗顔やら、背中をハードにやら、大事なところを丁寧にやら、エトセトラ、とまあそんな感じである。楽しんであつと言う間に綺麗サッパリ出来るというので、なにかと忙しく時間のない世間の人びとは、こぞって洗体機を買い求めた。ロボットによる二十四時間大量生産によってコストもギリギリまで下げられ、たいていの人に手の届く価格にできた。その頃建てられた建売住宅やらマンションには多く完備された。休むことなくフル稼働して生産しても、一時は品薄状態が続いた。国内のみならず海外でも発売され、大ヒットし、アメージング！ と絶賛され、クールジャパンの名を世界に轟かせた。〈全自動洗体機〉は、それほどまでに大ヒットしたのである。

独身サラリーマンの石川はずっと、今どき珍しい風呂なしボロアパートに住んでいたが、このたび全自動洗体機完備のワンルームマンションに引っ越した。

これまで無精な彼は、べつに風呂などなくても一向に構わなかった。時折思いたったように銭湯やらサウナに行く程度でじゅうぶんだった。まあ、行けば行ったでスッキリはした。だけど、毎日風呂に入るのは面倒だった。

そんな彼はたまたま会社で、新入女子社員達がコソコソ立ち話しているのを耳にした。「ネエネエ、石川さんてなんか臭わない？」「そうそう、不潔な感じだし臭いわ」「ちゃんと毎身体洗ってるのかしら？」「石川さん独身でしょ、きっと無精でグチャグチャの部屋にひとり住んで、お風呂もあんまり入ってないんじゃないのかしら」凶星である。

「結構見た目悪くないのにね」「うん、わたしもわりと石川さん、パッと見タイプよ」五郎喜ぶ。「だけど臭っちゃね…」「そうよね残念よね」「あれよね！ 今流行りの全自動洗体機でも買えばいいのよ。そうすればキャッチコピーじゃないけど、楽しんで全身ツルピカリンってね、アハハ」「それぞれ、わたしも最近洗体機がついたマンションに引っ越したんだけど、ほんとあれは良いわよ、オホホ」

このままではマズイ！ と、遅ばせながらも五郎は感づいた。このままではズルズルと風呂なしボロアパートで、一生寂しい独身生活を送るのはめに陥りそうだ。それに立ち話する女子社員達のなかには、入社式で初めて見たときから、その可愛さで気になっていた凜子ちゃんの姿もあった。幸いに彼女は聞き役で、会話にはほとんど加っていなかったのだが。それにしても…

石川五郎は引っ越しを決心した。それも無精な自分でも楽しんで全身ツルピカリンになれるという、全自動洗体機がついた部屋へと。良さげな物件がわりとすぐに見つかった。で、彼は引っ越した。で、全自動洗体機に入った。で、全身ツルピカリンとなった。で、スッキリサッパリした。で、まさにクールジャパンだと呟いたのである。

清潔となった五郎は会社での評判も上がり、女子社員達からちよくちよくと、食事の誘いなどを受けるようになった。

「石川さん、会社のそばに新しくフレンチの店できたの知ってます？ けっこう良さそうな店ですよ。よかったら今度一緒にディナーにでも行きませんか」

立ち話で五郎のことを汚い臭いと、一番になって陰口叩いていた、ちよいとケバいが、なかなか綺麗な新入女子社員の玲子が、彼を誘う。見た目がいくら綺麗でも、こんな女と食事を一緒にするのはゴメンだと、五郎がちよいと嫌みに応える。

「ゴメン俺あんまりフレンチとか好きじゃないんだ。そうだ！焼肉なんてどう？煙モウモウで油ギトギトの美味しい店知ってたよ。あっ！君。汚いのとか臭いのとか嫌いそうだよね、それじゃダメか…」

すると驚いた事に嫌みを嫌みと受けとらずに、玲子が言った。

「えっ、全然わたし大丈夫ですよ！臭いも汚れも気にしません。よろこんで石川さんに着いて行きます」

玲子のほうが五郎より何枚も上手だった。五郎は、以前自分のことを汚い臭いと蔑んでいた女を連れて、馴じみの焼肉屋へ行くはめとなった。玲子はニンニクの臭いなどまったく気にせずガツガツ肉を食らった。そして玲子は五郎を上手に丸めこみ、彼におごらせた。

兎にも角にも、彼は女子社員達からいろいろと誘われるようになった。誘われて正直悪い気はしなかった。否、愉快だった。調子に乗った彼は、お気に入りである凜子を自分から食事に誘ってみた。

「あのさ、凜子ちゃん今晚何か用事あるかな？」

「とくにこれといって何もないですけど。どうかしましたか？石川さん」

「よければ、本当によければでいいんだけど、一緒に食事でもどうかなって思っただけ。もちろん誘った僕がおごるよ」

「えっ、そんな急におごってもらうなんて悪いですよ。割り勘でいきましょう割り勘で」

「えっ！それってもしやオッケーってことかな？」

「ええ。で、どこへ食べに行きます？」

今どき珍しいほどにお堅い女と噂に聞く凜子である。五郎は八割方丁重にお断りされるだろうと、それ程の期待はしてなかったのに、意外にあっさり話に乗ってくれたことに、逆に驚いた。ひよっとして自分に気があるのでは？とも少々思い、ニヤけた。

小洒落たバルを最近見つけた五郎は、最初そこに食べに行こうと提案したが、彼女が焼鳥が食べたいというので、前から知っている焼鳥屋の暖簾をくぐることとなった。素直に焼鳥が食べたいという気取りのない凜子に、五郎は更に好感を持った。

「最近石川さんすごくモテるでしょ」

「いや、そんなことはないよ」

「いえいえ、みんな素敵だっていってますよ」

「いやあ…照れちゃうなあ」

つくねをつまみに生ビールを飲みながら五郎はニヤリ照れ笑いしてみせた。

「なんだか、こう、急に変わりましたよね石川さん？」

「うん、ちょっと……」

酔いが回るとともに舌も回りやすくなっていた五郎は凜子に、会社で彼女達の立ち話を偶然聞いてしまったことを話した。

「わっ、聞いてたんですか！失礼なこと勝手に話しててすみません。気を悪くされたでしょ？」

「いや、とくに凜子ちゃんは喋ってなかったじゃない。それに事実だから…」

五郎はそれまでの自分の無精と不潔を正直に凜子に話した。彼女を相手にペラペラとよく舌が回った。そして今は毎日全自動洗体機の世話になり、部屋も極力物を置かないようにして綺麗を保っていると語った。

「そうなんだ。わたしはお風呂大好きなんだけどな。なんでこんなに洗体機が売れてるのかどうもわたしには理解できない」

それから凜子は日本の風呂の素晴らしさを、せつせつと五郎に語って聞かせた。彼女はよっぽど風呂が好きなのである。その熱がこもった言葉の数々に、風呂などなくても生きていけるとさえ考えていた、五郎も心動かされた。

「なんだか久しぶりにゆっくり湯船につかりたくなってきたよ」

「そうでしょ、お風呂はとっても良いものよ」

「うん… そうかもね」

今宵焼鳥屋にて、風呂にちよいとばかり心動いた五郎は、それよりも、本格的に凜子に心を奪われたのだった。

全自動洗体機の出現により世間では風呂ばなれが進んだが、その反面で、様々な風呂をレジャーとして楽しむ風潮が広がり、風呂マニアなる者がメディアを通して風呂を語るようになった。

「今度の休みに風呂好きの友達と一緒に河原で五右衛門風呂パーティーやるんですけど、石川さんもよかったら来ませんか？」と、凜子が五郎を風呂に誘った。

焼鳥屋へ一緒に行き、以来、五郎と凜子はずいぶん仲良くなった。そして今では五郎もすっかり風呂の良さを認識し様々な風呂を楽しむようになっていた。

「最近流行りの五右衛門風呂だね！ ちょうど僕も入ってみたいと思ってたところだよ。まだ入ったことなかったからさ。よろこんで一緒にさせてもらおうよ。でもあれだね、準備とか大変そうだよ。あ、ひょっとしてあれかい？ この頃よく耳にする最初から全部用意されてるってやつかな」

「違う違う、そんなんじゃないわよ。自分達で全部設営するの。だけど心配しないでも大丈夫！ 友達に風呂のプロがいるから」

「そうなんだ、それなら安心だね。ところでもちろん水着着用だよ」

ニコリと凜子はうなずいた。その可愛い笑顔に五郎は胸をときめかせた。

土曜日の朝から五郎は、凜子と彼女の風呂好き仲間数名と伴って、電車とバスを乗り継ぎ河原へ向かった。河原に着くと既にそこには、空のドラム缶やら何やら荷台に積んだトラックに乗ってやって来た、風呂のプロたる男性二名が待っていた。挨拶を済ませるとすぐに皆で協力しあって、五右衛門風呂パーティー会場を河原に設営していった。風呂はドラム缶で四槽用意された。ブロックを組んだ上にドラム缶を乗せた。薪で下から火を焚き湯を沸かした。四槽それぞれ薬草風呂やら何やらと、趣向を変えた。風呂のまわりにはテーブルやらイスやら並べられた。タープが張られた。クーラーボックスには各種飲料、食料、などなど。コップに皿に… って、これ普通にアウトドアレジャーじゃないかい？ … まあ、そうとも言う。細かいことは気にしないでくださいな。

そして湯が沸き、入る順番を阿弥陀で決めた。運良く五郎は四槽の中のデラックス五右衛門風呂に、一番風呂となった。水着で脚立を上がり、湯船に浮かぶスノコにそっと足をかけた。ドラム缶の両縁を手につかみ、ゆっくり湯船にからだを沈ませた。

最高であった。目をつむり川のせせらぎを耳に聞いた。そよ、と風が吹いた。目をあけると、川のみなもがキラキラと太陽の光を反射させて綺麗だった。湯加減は、ちと熱かった。が、まさか茹で殺されはしないだろう、と、譲歩した。

「ヤッパ風呂が好き」そう五郎はしみじみ呟いた。

やがて五郎と凜子は風呂好きカップルとなり結婚した。二人は家を建てた。風呂場にはヒノキ風呂を据えた。フローリングにワックスをまめにかけて、家の手入れをした。ワックスがけでかいた汗を風呂に入って流した。そのたび家も体も綺麗になってスッキリサッパリとした。

右肩上がりだった全自動洗体機の売れ行きが、急下降し始めたと思った途端、ぱったり売れなくなった。

何でもかんでも機械まかせの世の中である。綺麗にするのも、洗濯機にはじまり食洗機にロボット掃除機に洗車機にと、エトセトラエトセトラ。本来自分が手間をかけて綺麗にするからこそ心地よい

のだ。されど忙しくてそれどころでない。ならば、せめて自分の身体ぐらい自分で洗って、ついでに心の垢のひとつでも落としてやろう、と多くの人が考え直したのである。特に日本国では、忙しい毎日にあって『ゆるり風呂につかるの幸せ』が再認識された。

日曜日、五郎と凜子が家でくつろいでいると、外から何やら拡声器を通した声が聞こえてきた。「こちらは廃品回収車です。要らなくなった電化製品、オートバイ、自転車、家具、〈洗体機〉など、何でも回収いたします」トラックの荷台には〈全自動洗体機〉が山積みされている。